「『歴史家論争』とはドイツだけの問題だろうか？」[1]

War der sogenannte Historikerstreit ein "deutscher Streit"?

エルンスト・ノルテ（Ernst Nolte）
別所良美　訳

1986年にドイツで始まり、東西ドイツの統合前夜まで、すなわちベルリンの壁崩壊まで続いた「歴史家論争」については手短に語ろうとしても、多くの人名と状況への詳細な言及を行なわざるをえません。この論争に加わったのは大学の歴史研究者だけではなく、政治学者や出版関係者、ジャーナリスト、政治家なども参加し、また私見では、前ドイツ大統領フォン・ヴァイツゼッカーやコール首相も加わったと言えましょう。

3人の歴史家が偶然同時に公表した論文をきっかけとして厖大な数の反論やコメントが公表され、3年弱のうちに1000本以上の論文と30冊以上の単行本が現われました。この現象は当時の政治的出来事を考えに入れなければ理解できないことです。1983年にヘルムート・シュミットの社会民主党政権に代わってヘルムート・コール率いるキリスト教民主同盟と自由民主党の連立政権が成立しました。この時期は「転換点　Wende」と呼ばれ、そしてこの連立政権は否定的なニュアンスを含んで「転換点政府」と言われました。また政府がベルリンに計画していたドイツ歴史博物館の問題や、そしてビットブルグの軍人墓地での記念式典にコール首相と米レーガン大統領が第二次世界大戦で没した米独両兵士の慰霊祭を行なったこと[2]が問題となっていました。その少し前には有名なドイツの映画監督ライナー・ファスビンダーの演劇公演が中止になったのですが、これは彼の作品がフランクフルトでの不動産投機の加熱ぶりを非難していたことが、反ユダヤ主義的であると批判されたためだったのです。[3]

これらの事件やそれに関わった人々について細かく述べることはここではできません。むしろ私はここでこの歴史家論争の内的な核心について述べ、そして分析の結果として次のことを示そうと思います。すなわち、たとえこの論争において「ドイツ特有の道」とか「ヨーロッパにおいて中心をしめるドイツ」とか「ドイツ人の罪」について激しい論戦が戦わされたとしても、この論争が単なるドイツ問題にとどまるものではなかったということです。そのために私は少し歴史を遡って考察せざるを得ませんが、そのために詳細を割愛せざるを得なくなることお許しいただきたいと思います。

論争の核心が何であったかについても様々な意見がありますが、まずは最も頻繁に引用されかつ攻撃された二つの文章を引用してみることが、この論争を考えるために有効であると思われます。第一の文章はエアランゲン大学の歴史家ミヒャエル・シュテュルマーのもので（彼はよく「首相の顧問」という烙印を押されています）、これは「歴史なき国における歴史」というタイト

ルで1986年4月25日づけの『フランクフルト・アルゲマイネ紙』に掲載されました。この論文によれば、ドイツで行なわれている歴史の再発見から明になったことは、「歴史なき国において未来を制するのは、記憶の内容を決定し、概念を作り出して過去を解釈する者である」と言われています。これは非常に一般的で抽象的な表現ですが、この文章は、新しいコール首相の政府をしてドイツ人を1945年の敗戦の衝撃から立ち直らせ、おそらくナチズムを歴史から追放することによって「普通の」歴史意識をドイツ人に再び獲得させる道を用意させるものであると解釈されました。ところで明らかに、いわゆる「68年世代」を代表する人々こそ実際には過去約20年間にわたって「概念を作り出して過去を解釈」してきたのです。もっとも彼らは自国の歴史との「普通の」関係を再び持とうとしたのではなかったのですが。したがって、シュテュルマーの発言は進歩的な考えに対する反撃をすべての反動勢力に呼びかけるトランペットの響きであると見なされたのでした。

第2の文章は同じく『フランクフルト・アルゲマイネ紙』に数週間後の1986年6月6日づけで掲載された私の論文「過ぎ去ろうとしない過去。われわれは過去について議論すべきか、それとも分断線を引くべきか？」からのものです。その文章とは「『収容所列島』がアウシュビッツに先行したのではなかったのか？ボルシェヴィキによる一階級全体の抹殺は論理的にもまた事実としてもナチによる「ユダヤ民族抹殺」に先行したのではなかったのか？」というものでした。シュテュルマーの論文とは異なり、私の論文ではナチズムが直接扱われていました。そこでは、ナチズムの問題が特殊ドイツ的な見方の枠から取り外され、世界大戦の時代というコンテキストの中に位置づけられていました。この問題をさらに明らかにしたのが、一年後の1987年に出版された私の著書『ヨーロッパの内乱：1917年から1975年』でした。新聞に掲載された先の論文もまだ草稿段階であったこの著作に基づくものでした。

上記の二つの論文と、ケルン大学の歴史家アンドレアス・ヒルグルーバーの小著『二面敗北：ドイツ帝国の崩壊とヨーロッパ・ユダヤ人の終焉』とに対して広範な公共的関心が集まったのは、1986年7月11日に著名なドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバーマスが大きな発行部数をもつ週刊新聞『ツァイト』紙上に「一種の損害賠償」というよくまとまった長い論文を寄稿したことに始まります。この論文でハーバーマスは3人の歴史家を「弁明的な傾向」をもつ「歴史修正主義者」だと断じ、伝統的な国家アイデンティティーを国家主義の立場から回復させようとしている、と非難しました。ハーバーマスが私ノルテの論文に最も反感をもっていたことは容易に見て取れます。彼は私を「傑出した風変わりな精神の持ち主」と呼んで敬意らしきものを表しているのですが、他方では私に対して「冒険的な議論」、「奇妙な背後哲学」「訳の分からぬ例証」「カリフォルニア的世界像の輪舞」といった非難の言葉を突きつけています。そして他の論者もこのような悪口雑言の爆撃に参加してきたのです。

続く数年間においてシュテュルマーが受けた主要な非難は、彼がＮＡＴＯ哲学の主導者だということ、つまり「ヨーロッパにおけるドイツの中心的立場」という考えを復権させ、ドイツ史における分断［ナチ犯罪の経験］を平板化し、もしかすると彼の意図に反しながらも、世界を不安

定にし平和をひどく損なうことになるドイツの再統一の方向へと活動している、というものでした。

私自身に向けられてた非難とは、ノルテは、ナチによる600万人のユダヤ人の絶滅という唯一無二のこの枢要な事件をボルシェヴィキの責任に帰しているという非難であるとおもわれます。すなわち、ノルテは全体主義理論に依拠し、それを過剰に解釈することによって、「赤色」全体主義と「褐色」全体主義、つまり共産主義とファシズムを同じものだと見なしている。彼は「ホロコースト」の唯一性を否定し、それを「予防的殺人」と見なしてさえいる。ノルテは、共産主義がファシズムに単に時間的に先行したという関係を一つの因果関係へと捏造している。彼が行なっている並置や比較は許されるべきものではない。例えば彼は、トルコにおけるアルメニア人に対する残虐行為や「スターリンの後背地（シベリア）」における餓死をナチによる残虐行為と同列のものとして比較し、ナチによる残虐行為を、世界で最も発展し文明化したと考えられている一つの国において技術的に完璧に組織された野蛮への退行現象であると見なしている、というものでした。さまざまな分析がなされたあげく、ノルテへの主要な非難は、彼が国際的な観点を強調することによって、ナチズムというドイツに特有の問題を脇に追いやってしまったということ、そしてナチズムによる権力奪取を可能にし、潜在的あるいは顕在的な共感を全ヨーロッパのナチに示していた「ブルジョアジー」を擁護したいと望んでおり、「国家を弁護しようとする要請」に従っている、ということになりました。ただし次のような議論も示されています。すなわち、実はノルテを「転換期の歴史家」と呼ぶことはできないのであって、彼はすでに1963年に出版され、左翼にも賞賛された『ファシズムとその時代』において、ファシズムすなわちムッソリーニの「標準ファシズム」とドイツの「人種的ファシズム」とを「反ーマルクス主義」と定義し、それをソヴィエト共産主義に対する反動であると規定していた。ハナ・アーレントやカール・J・フリードリッヒの全体主義理論を批判し、スターリニズムの構造を、特にそのテロリスト的性格をナチズムのそれと比較し、大局的には両者が同一であることを示したことがノルテの功績なのだが、しかし現在のノルテは一つの現象を他の現象の原因とすることによって彼の理論を改悪してしまい、そうすることでこれら二種類の全体主義と対照をなす「自由主義システム」や「西欧的な立憲国家」を近代の具現者に祭り上げてしまっているようである。著作の中でノルテは、ヒトラーとその一味が「アジア的」脅威に直面していると感じていたのだと言わなかっただろうか。またこのことは、ヒトラーが自分を「ヨーロッパ市民」と見なし、「ヨーロッパ文化」を主導していると考えていたことを意味しなかったのだろうか？と、このようにノルテは批判されています。しかし批判者たちが見落としていたのは、この「アジア的」という形容詞に引用符がつけられていたこと、それゆえ広く受け入れられていたとはいえ主観的なものであったことが示されていたのだということです。そして私がナチによるユダヤ人絶滅政策をも「アジア的行為」と呼んでいたことも見落とされていました。同様にまた、「社会的」絶滅と「生物学的」絶滅とを私が明瞭に区別しており、したがって両者を「同一視」などまったくしていなかったにもかかわらず、そのことがほとんど見落とされていたのです。

このような議論を続けて、エーバーハルト・イエッケルやハンス・モムゼン、ヴォルフガンク・モムゼン、ハインリッヒ・アウグスト・ヴィンクラーなどによる賛否両論の詳細に立ち入ることが私の意図ではありません。むしろこの論争を再考するための準備として、今日の世界情勢の一見単純で当たり前の特徴を概観してみたいと思います。

われわれが直面している世界では、「近代化Modernität」ないしは西欧でよく言われる「グローバリゼーション」が不断に進行しています。1945年当時には漁村や小さな町しかなかった所が今では百万都市になり、摩天楼がそびえ立っていたりします。例えばインドなどかつて植民地であったところで、今やスターリンやルーズベルトが夢想だにしなかったマイクロ・エレクトロニクスの精巧な製品がつくられています。巧妙に作られた機器が火星の表面を探索し、太陽系の惑星の写真を撮っており、しかもそのような機器を製作しているのがアメリカだけではないのです。一秒の何分の一の時間の間に地球上の最も離れた場所に情報を伝達することも可能です。世界中で人間や国々はますます似通ってゆき、20世紀初頭にはまだ顕著であったヨーロッパの植民地保有国の傲慢さは今日では時代遅れの遺物に思えます。世界の政治的な統一さえも大筋では「国連」という形で出現しています。異なった地域に特有の伝統的な文化や宗教はその威力を失い、統一的な世界文明に道を譲ろうとしています。「近代化」は今の時代の圧倒的な現実となっています。問題になるのは、近代というものが、フランシス・フクヤマが主張するように、「自由主義的民主主義」と同義のものでしかないのかという問題のみです。

しかしながらこのように広範に統一された世界やほとんど等質化した人類が、現実にはさまざまな争いによって分断されています。今日ほど多くの国家が存在したことはかつてなく、テロ行為から全面的な内乱にまで及ぶこれほど多くの争いもかつてなかったことです。世界における豊かな地域と貧しい地域との格差は広がっています。二つの超大国間での核戦争の危機はそれほどでもなくなりましたが、人類の存続に対する不安の原因がこれほど多いこともかつてなかったことです。「環境汚染」はゆゆしき事態にまで進展しています。人口の爆発的な増加を考えると、生活水準の世界的な調和というものがアメリカの生活水準を基準に追求されているとすれば、地球は文字通り崩壊するでしょう。世界のどの国家も、どの政党も、どの機関も、これらすべての困難を処理し、争いを解決することができると主張したり、もし自分が完全な勝利を収めれば調和を約束できると言いうるようなものは存在しません。最大の人口を有する中国は産児制限という痛ましい政策をとり、また一定の限度内とはいいながら、市場経済すなわち「資本主義的」近代化へと向かう開放政策をとっています。それはまさにほんの20年前に中国が激しく呪い、否定したものでした。

ところで、20世紀の終わりに我々が目にしている複雑で矛盾した諸結果を引き起こした近代化過程の始まりに対して19世紀の人間はどのように思想的に対処したのでしょうか。

ここでは二人の思想家に限って瞥見することにします。周知のようにオーギュスト・コントは

世界史の進化を3つの段階に区分しました。第3段階である科学的あるいは実証主義的段階では、人類は政治－行政的な統一に向かい、すべての宗教的で形而上学的な観念は消え去り、秩序ある調和が確立されるはずでした。

マルクスや初期社会主義者たちにとっては、世界史の過程における敗者であり甚だしい悲惨のなかに生きる人々、すなわちプロレタリアートこそ未来の勝利者となるはずでした。汎ヨーロッパ的な集団としての、そしてもはや異なった国民へと分割されることのない全世界的な一つの集団としてのプロレタリアートは、フランス革命に倣って「世界革命」に着手し、それによって人類は貴族やエリートや社会機構から解放され、友愛で結ばれた調和を実現し、そして「分業」や専門化に従属することももはやなくなる、と考えられていました。

コントもマルクスも同様に「進歩主義者」であり、彼らの思索を導いていたのは当時の最も強烈な現実、すなわち科学的知識の発展と統一化と世俗化であり、これらは一般に「進歩」と呼ばれていました。しかしながらこのような進歩をどう解釈するかという点ではコントとマルクスの意見は大きく分かれており、結局、彼らは潜在的な敵対者でした。すなわちコントは革命を無秩序の源と見なし、社会主義には宗教的で反科学的な救済論への転落の危険性があると考えていました。

今日の視点から見れば明らかに次のように言うことができます。あらゆる「進歩主義者」と同様にマルクスとコントも「文明化の過程」という観念に導かれており、しかもその観念に非常に単純化され調和化された解釈を、ただしそれぞれが対立し合う解釈を与えたのでした。このために「堕落としての歴史理論」という古代の歴史観が再登場し得たのでした。この歴史観はヘシオドスまで遡り、フランス革命時代には、明確に区分されたヒエラルヒーと秩序意識をもった封建的な社会、あるいは高貴で貴族的な社会の唱道者たち、例えばドゥ・メストルやゴビノーなどによって詳しく展開されました。

堕落史観の再登場という観点からして、ボルシェヴィキによるロシア「十月革命」が二十世紀の最も重要で画期的な事件と見なされなければならないのです。というのは十月革命においてはもはや個人が思想を展開ししているというのではなく、行為が一つの強力な集団によって遂行されたのです。ただしこの集団は二人の傑出した思想家の観念と、それまであらゆるところで抑圧されてきた共産党によって指導されていたのですが。そのためにボルシェヴィキは途方もない約束をたずさえて登場してきました。すなわち、まずヨーロッパで、そしてその後まもなく全世界で勝利をおさめた暁には、この「世界革命」を通してボルシェヴィキは戦争や、人間による人間の抑圧や搾取のない世界というまったく新しい状態を出現させるだろう、それは決定的な調和局面としての「社会主義」が無情で利己的な競争状態である資本主義を最終的に克服した状態であろう、というものでした。しかしながら、「全面的に異なった状態」へ移行するためには、大戦の勃発に対してのみならず現在の悲惨に対しても責任を負うところの階級が絶滅されることが必要であるというのが、マルクスとエンゲルの教えでした。そして実のところ、トマス・ミュンツァーが「神なきものたち」の絶滅を呼びかけたように、レーニンは「世界のブルジョアジーの

絶滅」をはっきりと呼びかけており、あるいは1918年にジノヴィエフ（Sinowjew）は、ロシアの多数者と共生不可能な十分の一の人間を絶滅させることの必要性を語っています。歴史上はじめて、マルクスの教えに依拠しつつ一つの哲学的歴史観をもった運動が大国において権力を握ったのであり、この共産主義運動は世界の多くの場所で信奉者と賛同者を獲得することができました。その信奉者たちは、絶滅の恐怖にさらされていたブルジョア層の中にさえ存在しました。その理由は、レーニンの政府が単に言葉だけで反戦を唱えていただけではなく、ドイツとの和平協定を結んで戦争を終結させる勇気を示したからでした。イデオロギー支配的な（ideocratic）政府の存在は世界史に新たな性質を導入することになったのです。すなわちそれは一方ではあらゆるところで熱狂と強烈な希望を呼び起こしましたが、しかし他方ではロシア革命の範例に従い、破滅の恐れに曝されていた階級や階層の間に前代未聞の恐怖を呼び起こしたのでした。この政府は世界の進歩主義者たちを賛同者と敵対者へと二分してしまう傾向をもっていました。そのために「反動家たち」と呼ばれた人々は、新らたな恐怖に対抗するために、新らたな決然性を抱かざるを得なかったのです。

ところが、ボルシェヴィキが自分たちの敵であり「反動家」であると見なした集団、すなわちブルジョア階級はそれまでは西欧および中欧、そしてとりわけアメリカ合衆国において近代化を進める進歩的勢力でした。彼らは決して買弁家といった孤立した経済的ブルジョアではなく、むしろさまざまな仕方で君主や貴族たちの旧体制および知識階級と結びついており、また重大な危険の際には、多数のプチブル（小市民）からの支援を期待することができました。もし義勇兵団（Freikorp）がドイツにおけるレーニンの追従者を圧倒することがなかったならば、20世紀のおぞましい惨状は起こらずに済んだとか、したがって計画経済と市場経済との混在と対立もなく、また異なった志向性と対立した利益を有する国家や文化の葛藤に代わって調和した状態が出現したなどと考える人間は誰もいないでしょう。しかし「罪ある者」の集団のみならず「悪しき者」の集団をも絶滅することを一つの要素とする唯一的な出来事としての「世界革命」という観念は現在でも非常に魅力的な観念であり、ボルシェヴィキの没落後も生き延びています。

その当時までは「近代化」の先端であり中心勢力であると自認していた世界の「ブルジョアジー」は、1923年以降にドイツでさえもある程度の安定が達成された時期に、［ソ連・共産主義国家の成立という］新しい状況に対してどのように対応することができたのでしょうか。

ブルジョアジーは、スターリン指導下のソヴィエトが世界の辺境国となり、他国をわずらわすことのない国家になっていると信じ、「平常の」企業活動を続けることもできたました。というのもソヴィエトは国内の諸困難で手一杯であり、その上にカウツキーを指導者とする多くの社会主義者がスターリン的ソヴィエトを非マルクス主義的であるとか、さらには反マルクス主義的であるとさえ主張していたのでした。このようにしてこれまでと変わらぬ政治が継続され、ただ世界大戦の結果できた国際連盟によって国際政治がより穏健な形になっただけだ、ということも可能でした。ブルジョア世界はその政治活動の主要対象をソヴィエト連邦とし、さらに自分たちの優位を信じて、「包容」政策を採ることも可能でした。すなわちソヴィエト連邦と経済関係をもち、

それを強化することによって、長期的には敵側ソヴィエト連邦の体制を内部から弱体化し、ついにはその解体に導くことになろう、というものでした。シュトレーゼマンもロイド・ジョージもこの方針をとっていました。ただし彼らは少なくとも時にはこの政策に大きな不安を抱いていました。というのはこのソヴィエト連邦という敵は、前世紀における国家の敵とは全く逆に、彼ら自身の国の内部に決然としたソ連信奉者の政党を統制していたからでした。

もうひとつの可能性としては、ソ連共産主義および共産主義全般を不倶戴天の敵と見なす政党が「ヨーロッパ」ないしは「西欧」において優勢となるという可能性があります。この政党は、世界革命について理解せず、それを単なるレトリックに過ぎないと見なし、[共産主義からの]絶滅政策の脅威に対して自分も絶滅政策を唱えるといった政党です。そのような戦闘的な反共産主義運動がイタリアのファシズムでした。しかしイタリアの国力はソ連と対抗するには不十分であり、第一次世界大戦の勃発まではイタリア社会党の指導者であったムソリーニは、彼の社会主義者としてのかつての経験とイタリアのヒューマニズム文化の影響が大きかったために、共産党やその他の諸政党の禁止以上には全面的な対抗絶滅政策を指導することができませんでした。

本当にラディカルな反応は、ソ連と対抗する国力をもち、また第一次世界大戦における敗北のために絶望の淵に追いやられていた国家、すなわちドイツにおいて始まりました。ドイツは第一次世界大戦の少し前からアメリカ合衆国に並ぶ主要産業国であると自認し、ロシア皇帝の後進的農民国家よりははるかに優れていると考えていました。しかし敵と同等の力量をもつためには、ドイツの体制もイデオロギー支配的（ideocratic）であらねばならず、そして不正と搾取から世界を救済するという偉大な希望に対してはドイツも、破壊的勢力を抹殺することによって世界を回復させるというのと同等の希望を提示することができなくてはなりませんでした。このドイツも、ソ連に限らず敵というものを絶滅することを展望せねばならりませんでした。ところで千年王国の健全さを確かなものとするために、ドイツは近代の堕落に責任を負う集団を絶滅しなければならなかったのです。このような可能性を（もちろん決して必然性ではないのですが）行動に移したヒトラーのナチスの背後にあったのは、産業ブルジョアジーではなく、プチブルという周辺階層であり、多くの元軍人層でした。

このような理由によって、1933年１月30日の「政権獲得」は時代を画する第二の世界史的事件と見なされねばなりません。この時代は「ファシズムの時代」であると言えます。もちろん、ヒトラーこそドイツ修正主義の最もラディカルな唱道者であり、軍や産業界や政府官僚の意を体現して第一次世界大戦をもう一度やり直そうとし、それによってドイツを第二の敗北とこの上ない惨状に投げ込んだ人間である、と言うことも全くの誤りではありません。他方また、ヒットラーをまず第一に民族主義者とみなすことも可能です。ヒトラーはスパルタを「世界史における最も明快な民族主義国家」であると賞賛し、それによってスパルタにつきまとっている伝統的な貴族の傲慢さを民主化・大衆化したのでした。この解釈によれば結局、ヒトラーは何よりも妄想にとらわれた反ユダヤ主義者であり、何百万ものユダヤ人を大量虐殺するという不可解な行為を行な

い、その結果として彼の国を筆舌に尽くしがたい恥辱へと投げ込んだ人間であったと解することができるでしょう。しかし私の確信するところでは、このような見方はすべて完全な誤りではないとしても、二次的な重要性しかもたないと思われます。というのはソビエト共産主義に対するヒトラーの敵意は、ヒトラー―スターリン協定に言及したからといって、消し去ることのできるものではないからです。ところでもしソビエト共産主義に対する敵意がヒトラーの人生を貫く主要な衝動であり、彼の他の動機もこの衝動に深く関わっているのだとすれば、まず第一に、「ユダヤ人問題の最終解決」という「強迫観念」は、ソ連においてブルジョアと富農の絶滅とは反対に、近代化を進める役には立たなかったのであり、むしろソビエト社会主義という形の近代にしろ、アメリカ資本主義という近代にしろ、近代を抹殺するものであったのです。ところが他方では、ブルジョア階級と独立農民を絶滅することによって近代化を進めるという考えも、長い目で見れば反生産的で、最終的には国家を崩壊にもたらす特異な幻想ではなかったのではないでしょうか。

それゆえ「収容所群島」すなわち敵対階級ならびに党内の反対勢力を抹殺するというソヴィエト共産党の政策は、「アウシュヴィッツ」すなわちユダヤ人の抹殺政策よりも「一層オリジナル」であったということを否定することはできないように私には思えます。ただしユダヤ人絶滅政策は「なお一層おぞましいもの」でした。というのも、ナチが［ソ連共産主義を］「ユダヤ・メシアニズム」といったときに非常に具体的なこと［ソ連共産党の幹部の多くがユダヤ人であったこと］を考えていたとしても、それはまったく間違った解釈であり、例えば中国共産党の指導部には一人もユダヤ人がいなかったのです。従って、20世紀を解釈するのに、それを例えば異なった伝統にもとづいて、近代化の過程をそれぞれ極端に単純化して理解した二つのイデオロギー的な政治体制の間での「ヨーロッパの内乱」とみなすという考えは、単に「ドイツから見た」解釈ではなく、アメリカ人でもロシア人でも考えだし得たであろう通国家的な解釈です。これが私が主張したい論点です。事実1990年代にこのような見方は、アラン・ブロックやエリック・ホスバウムやフランソワ・フュレの著作にも多少とも基本的には共有されています。

もちろんこのような解釈は、ドイツとその役割をどう評価するかに影響を及ぼします。それはドイツを賞賛するものでもなく、またドイツを糾弾するというのでもありません。シュトレーゼマン首相のドイツはポーランドに関しては修正主義的であり、ソ連に対しては拒否的であると同時に協働的でした。もしソ連の影響下になかったヨーロッパ諸国が、第二次世界大戦後アメリカの庇護のもとで追求し、また成功した「緊張とデタント」政策をとっていたならば、そこでドイツは傑出した役割ではなかったとしても重要な役割を担ったことでしょう。しかし実際にドイツがソ連と比肩し得るようになったのは、世界革命構想というイデオロギーの炎が、一人の男とその取り巻きの頭の中で、諸民族のヒエラルキーを作り上げることによって世界の健全さを保証しようという対抗構想のイデオロギー的炎を点火したときでした。ただしヒトラーが国民の大多数に対してほとんど無制限の権力を獲得し得たのは、ただ彼が「ベルサイユの怨念」といったもっと単純な感情を大衆と共有していたからでした。

ヨーロッパの内乱という考えは、「歴史家論争」で最も大きな批判の声を上げた論者によって

唱道されている否定的ナショナリズムという考えと大きく対立することは否定できません。否定的ナショナリズム[4] という考えは、19世紀の自由主義者がホーエンツォルレン家やユンカーの［プロイセン］ドイツについて描いたイメージを少し修正しただけのイメージに固執しており、ビスマルク帝国の歴史家が賞賛したものを糾弾さるべきものに変えてしまっている。それはナチのイデオロギー的特質を大抵は周辺的な思想家の著作物を分析することで説明し尽くされると考え、ナチのイデオロギー的特質をソ連共産主義との世界史的な対決にまで遡って後付けようとはしていません。その結果、否定的ナショナリズムは20世紀前半の歴史を、ドイツ人という「罪深き国民」が、まったく不可解にも幻想に踊らされて、ユダヤ人という「犠牲の民族」を攻撃したとしか、解釈できないのです。そのため「修正主義者」に加えられた主にドイツ人によってなされた主要な非難は、修正主義者が「ドイツを罪から逃れさせること」を狙っているというものでした。ドイツの歴史をこのような解釈すれば、そこには「真の」とか「開明的な」歴史といった言葉はほとんど見受けられないことになります。

たいてい暗示的に表明されるだけですが、同じく受け入れがたいと私に思われる主張として次のものがあります。すなわちヒトラーを理解するなどということは原理的に否定されねばならないのであり、真面目に取り上げ、平等な考察に値するようなヒトラーの動機を注意深く検討することなど否定されねばならず、ヒトラーについては「悪魔的」「絶対悪」「狂気」「不可解」といったカテゴリーで充分であるという主張です。

このような主張は端的に非学問的です。その上、平等に扱ったとしても結論は非常に異なったものになるでしょうし、また平等に扱ったからといって、裁判もなく無抵抗な人々を殺害したことの悲惨さに対する明確な道徳的判断ができなくなるということはないのです。

ところがこのような非学問的で単に道徳論的な考えがドイツ人以外の多くの人々によっても唱道されています。この観点からも、「歴史家論争」は単にドイツの論争にはとどまらないのです。エリー・ヴィゼル、ゴードン・クレイク、チャールズ・マイヤーといった名前をここでは挙げておけばよいでしょう。しかしながらすべての外国の人々が歴史家論争の中に、権力と影響力を要求している新生ドイツという危険な兆候を見ているわけではありません。しばしば自己批判的な問いも発せられています。すなわち1945年の勝者の勝ち誇ったイデオロギーに固執するのは正しいのだろうか、とかまた、勝者自身の歴史の中にも重大な断絶や否定的な歴史的展開が見出されうるのではないか、といった問いです。このように問うことを通して、歴史家論争はよりよく理解されることになるでしょう。

ロシアではソ連の崩壊後、「過去の清算」が進展しており、またすでに早い時期からそれについて多くの偉大な文学が作られました。その最良のものがアレクサンダー・ソルジェニツインの『収容所群島』です。これらの文献の中で、「スターリン体制」やまた時には「レーニン主義」はしばしば「歴史上最も非人間的な政治体制」であると描かれており、そして多くの場合、ドイツナチズムとヒトラーを準備した最も重要な前提条件であるとされていました。しかしこれに反対する意見にもまた論争にも事欠かないのも事実です。もし私の観察が正しければ、日本での「修

正主義」はむしろ、「我々の祖先は実は正しかったのに、現在中傷されつづけている」という言葉に現われているような一種の拒否的態度という反動といった方がいいでしょう。

フランスではすでに何十年も前にイスラエルの歴史家ゼーフ・シュテルンヘルの仕事がセンセーションを巻き起こし、激しい論争を引き起こしました。というのも彼が私の『ファシズムとその時代』の議論を採用して、ヨーロッパにおいてファシズムはフランスで始まったと主張したからです。しかしそれにもかかわらず彼は悪意に満ちた攻撃に巻き込まれてはおりません。

イタリアではレンツォ・デ・フェリーチェというイタリア屈指の歴史家が1975年という早い時期に「ファシズムと反ファシズムという安易な図式」に反対の声を上げ、歴史のさまざまな見直しを可能にする「もっと非政治的でもっと歴史的な」解釈の必要を説き、マルクス主義的解釈とは対照的に、ファシズムを没落する中間層の運動としてではなく、興隆する中間層の運動として捉えるような歴史の見直しを提唱しました。

デ・フェリーチェのテーゼもまた激しい論争を引き起こしました。このように、「歴史家論争」に相当するものをロシアやフランスやイタリアに見出すのもまったく許されることなのです。この観点からいって論争は単にドイツに限定されたものではありません。

マスコミが「修正主義者」とか「挑戦者」と名付ける人々があらゆるところで要求しているのは、50年以上の隔たりを介することで我々は今や終わろうとしている今世紀の歴史についてもっと客観的でバランスの取れた判断ができるようになるべきであり、敗者の立場に立つこともなくまた明快な道徳的判断を控えることもなく、しかも敗者に正当な扱いをなすべきである、というものです。

しかし「修正主義者」に反対する傾向が過激になっていることも事実であり、この傾向は勝者の勝利を事後的に一層完全なものとし、敗者への道徳的非難を精神的な破壊にまで押し進めようとするものです。このようにして最近スイスは、第三帝国と商取引を行なったことで戦争を長引かせたという理由で厳しい攻撃に曝されていると感じています。またユダヤ系アメリカ人作家のダニエル・ゴルトハーゲンは、特にドイツで経済的に非常に成功した著書[5] の中で、ユダヤ人絶滅の過程にドイツの指導層が深く関わっていたという広く認められたテーゼでは満足せず、多くの普通のドイツ人が、19世紀に広範に浸透していた反ユダヤ主義の伝統を基にして、「喜んで」また「熱狂して」ユダヤ人の大量殺人に加わったことを示そうとしています。彼によれば、この大量殺害は主にガス室の中で起こったものなどではなく、(ガス室の重要性が過度に誇張されていると彼は言っています)、幾人かの例外を除いてすべてのドイツ人は当時自分から進んでこの絶滅行動に参加した、というのです。

長期にわたって反ナチ思想をもっていた非常に尊敬されている歴史家たちもスイスに対する告発を否認しており、さらに連合国側に対してもひるむことなく［その非道を告発し］反撃しています。さらに歴史家論争においては「修正主義者」の「四人組」に反対して戦ったドイツの歴史家のうち少なからぬ人々が非常にはっきりとゴルトハーゲンの見解を否定しています。私の信ずるところでは、「ドイツ人の」と形容される「歴史家論争」は数多くの兆候のうちの一つであり、

それらの兆候を考えれば、世界の諸国民や諸文化が確かに心地よく魅力的ではあるが単純化するだけのイデオロギーを放棄し、またそれに対応する図式的な解釈をも放棄しており、また自己自身のアイデンティティーを失わずに相互理解の精神をもって、高度に複雑な状況から生じる困難な問題を解決しようと努力している、と言えるのです。

すでに久しい以前から、ものを考える人間すべてに明らかになっているように、「資本主義」と「社会主義」は天国と地獄の如く反対状況として対極をなしているのはありません。「社会化」過程と「資本化」過程、すなわち政治的決定に基づいた計画経済と、個人や企業の個人的経営に基づいた市場経済とは共存しており、程度の差はあれあらゆるところで共存するはずです。どちらか一方の形式を抹殺しようとする試みだけが致命的な誤りを犯すことになります。同じように致命的なのは、保存をせずに進歩だけを実現しようとしたり、何の進歩もなく純粋に保存だけをしようとする試みです。そのような試みが、「ＮＥＰ」において幾つかの逸脱はあったとしても、レーニンやスターリンの時代のソヴィエト連邦で行なわれたのです。そのことの結果が、他にも原因があるとしても、ファシスト体制という劣らず致命的な反動だったのです。こうして最後に再び、「歴史はわれわれに何を教えうるのか？」という古来からの問題が登場します。状況が新しくなったといった議論でこの問題を片づけてしまうべきではないと私は確信しています。この問題を討論の、さらには論争の対象とすべきだと私は確信していますが、あの「歴史家論争」がそうであったように、それを多くの誹謗中傷にまみれた論争とすべきではないと考えます。

訳注

(1) 本稿は元ベルリン自由大学エルンスト・ノルテ（Ernst Nolte）教授が来日された際に、名古屋市立大学人文社会学部において1997年10月18日に行なわれた講演の原稿の翻訳である。教授の原稿には註はつけられておらず、以下のいくつかの註は訳者が補ったものである。

なお本講演は人文社会学部の研究プロジェクト「現代思想研究」と国際文化学科の共催という形で行なわれた。

ノルテ教授（1923年生）は"Der Faschismus in seiner Epoche"（1963）によってファシズム研究者としての名声を得、1965年からマールブルグ大学教授、その後1973年にはベルリン自由大学に移り、1991年に同大学を退官している。教授の歴史学的な主著としては他に"Deutschland und der Kalte Krieg"（1973），"Der europäische Bürgerkrieg 1917-1945"（1987）が挙げられる。教授はもちろん著名な「歴史学者」であるが、教授の学問研究の出発点は哲学であった。1943年にはベルリン大学のニコライ・ハルトマンのもとで哲学を学び、その後フライブルグ大学へ移籍してマルチン・ハイデッガーに師事することになる。戦後の混乱期が過ぎ、ハイデッガーがフライブルグ大学に戻ると同時にノルテ氏も同大学に復学するが、ハイデッガーがすでに退官後であったために、代わりにオイゲン・フィンクのもとで1952年に論文"Selbstentfremdung und Dialektik im Deutschen Idealismus und bei Marx"によって博士号を取得している。このように哲学者としての一面をもつノルテ教授には「哲学三部作」と呼ばれている"Nietzsche und der Nietzscheanismus"（1990），"Geschichtsdenken im 20. Jahrhundert"（1991），"Martin Heidegger"（1992）といった著作もある。

しかしノルテ教授が歴史学者のサークル外で日本でも知られるようになったのは、1986年に始まった「ドイツ歴史家論争」を通してであろう。ナチズムの出現というドイツにとっての「比類なさ（Einzigart-

igkeit)」を起点としてドイツの戦後民主主義を守ろうとするハーバーマスと、ナチズム現象をボルシェヴィキとの比較によって相対化しようとする「歴史修正主義者」ノルテという図式で日本でもこの論争が紹介されてきた。近年日本でも過去の克服が様々な形で問題になっている今、「ドイツ歴史家論争」をノルテ教授の現在の立場から回顧している本稿はわれわれ日本人にとっても興味深いものであると言えよう。ただしバランスをとるために、ハーバーマスの立場からの「歴史家論争」の総括書として次のものも挙げておきたい。Hans-Ulrich Wehler, Entsorgung der deutschen Vergangenheit ? : Ein polemischer Essay zum "Historikerstreit", München 1988.

ちなみにノルテ教授に、"The Japan Times Weekly" (May 31, 1997) に掲載された藤岡信勝と自由主義史観研究会の最近の動向についての記事をもとに、藤岡氏などの日本的「歴史修正主義」についての感想をうかがったところ、情報不足で判断はできないとの保留付ではあるが、単純な愛国主義への後退に対してはノルテ教授自身が距離を取らざるをえない、との答えであった。

(2) この墓地にはナチ隊員も埋葬されていたことが問題になった。

(3) 1976年にかかれたファスビンダーの『塵芥と都市と死』は、反ユダヤ主義であるという非難を受け、1985年10月31日にフランクフルトで予定されていた初演は、デモによって妨害された。

(4) この行論が言わんとしているのは、ナショナリズムの全否定とい発想自体は、今だナショナリズム概念にとらわれており、世界史的なイデオロギー対立の問題を正当に扱うことができない、ということであろう。否定的ナショナリズムで示唆されているのは、ハーバーマスの「憲法愛国主義」と思われるが、これは、国民のアイデンティティーを伝統や文化や民族性に基づかせるのではなく、民主的な憲法への忠誠という形で確保しようとする考えである。この考えをハーバーマスはシュテルンベルガーから受容している。Vgl. Dolf Sternberger (1990): Verfassungspatriotismus (Dolf Sternberger Schriften X), Frankfurt am Main, Insel Verlag

(5) Daniel Jonah Goldhagen (1996): *Hitler's Willing Executioners; Ordinary Germans and the Holocaust*, Abacus